

## ごあいさつ

令和4年のNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」の放映により、神奈川県鎌倉市をはじめとする鎌倉武士ゆかりの場所や、関連文化財への関心が高まっています。埼玉県内でも「埼玉の武士大活躍」として、畠山重忠ゆかりの場所である深谷市をはじめとして、多くの市町村がイベントや企画展を催しています。

秩父郡は桓武平氏の流れを汲む秩父氏の故郷であり、畠山重忠をはじめ鎌倉殿を支える有力御家人を輩出しました。郡内の多くの武士は、先祖から受け継いだ所領を守るため、多くの合戦に参加し、鎌倉や京都に出仕していたことが知られています。一方で武士は、妙見信仰や浄土信仰のように、新たな文化を秩父の地へもたらす存在でもありました。秩父夜祭など、秩父のシンボルとして受け継がれている文化には武士たちの姿が息づいています。

現在、町教育委員会では、みんなの学びプロジェクトとして、「みんなの学」の推進に努めています。本展が、皆野町の歴史や文化をより深く理解するための一助となれば幸いです。

結びにあたり、写真の掲載を快くご許可いただいた諸機関のみなさまに心から御礼申し上げます。

令和4年9月5日 皆野町教育委員会

## プ22ーダ

本展では、現在放映中のNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」に合わせ、郡内と町にゆかりのある武士を紹介します。

第1章では、秩父氏や児玉党、丹党について解説します。秩父氏は、牧の経営で力を蓄えるとともに、児玉党や丹党と関係を結ぶことで大武士団に成長した「高家」の武士です。一方、児玉党や丹党は「党」の者と呼ばれ、多くの合戦で活躍しました。

第2章では党の者のうち、大浜氏や大淵氏など、町ゆかりの武士を含む平姓児玉党や、秩父神社に深く関わった丹党中村氏について、古文書や文化財をもとにその活躍を紹介します。

## 第1章 秩父ゆかりの武士のプ2フィール

### 1-1 高家の武士と党の者

#### (1) 兵から武士へ

平将門の反乱を描いた『将門記』には、騎馬にまたがって弓を射、太刀を振るう「兵」が描かれています。彼らは普段は土地の耕作に携わる農民でしたが、平安時代後期になると、弓馬の芸を生活の糧とする職能集団が現れます。これが「武士」です。

彼らは荘（荘園）や郷・保（国衙領）、牧の経営者として多くの郎従や下人を従え、家を形成します。その中心が館・屋敷と税が免除された直営田からなる「先祖相伝の地」であり、武士はその地を名字に冠し、自らが武士である証としました。

#### (2) 高家と党の武士

10世紀以降、天皇の血筋を引く軍事系貴族の中に、国司への任命や俘虜鎮圧をきっかけに東国へ「下向」する者が現れます。このような一族は高貴な出自として「高家」と称されます。また鎌倉時代、内裏への伺候や合戦の動員に際して発せられる文書には、北条や三浦、和田など「家」単位で記される者と、児玉、丹などのように「党」として一括されて呼ばれる武士が見受けられます。

高家・家の武士は、出自の貴種性を持ち、幕府内で有力な地位を占めました。一方党の者は大部分が中小武士で、親分・子分など擬制的な関係を含む血縁や地縁のつながりによって武士団を形成していたとされています。

## 1-2 秩父氏・児玉党・丹党

### (1) 秩父氏

#### ◆武基・・・秩父氏の秩父進出

桓武天皇を祖とする高望王の子孫のうち、平良文の流れを汲む高家の武士です。将恒が中村(現秩父市)へ進出し、「**武基**」の代に**秩父氏館**(旧跡:現秩父市下吉田)へ移ったとされます。武基は「**秩父牧別当**」を称し、丹党と関係を結ぶことで、石田牧を掌握したと考えられます。

#### ◆重綱・・・秩父を離れた秩父氏

重綱は秩父氏の中でも重要な人物で、**児玉経行**の娘と婚姻関係を結び、**行重**と**行高**を養子にしています。また「**武蔵権守**」を称し、在庁官人として武蔵国に何らかの權益を有したと思われれます。

重綱の代に秩父氏は、本拠を**大蔵館**(県指定史跡:現嵐山町)へ移します。同地は畠山重忠が館を構えた**菅谷館**(国指定史跡:現嵐山町)と都幾川を挟んだ向かいにあり、重綱の子・重弘と重隆が秩父氏嫡流をめぐる争った「**大蔵合戦**」の舞台です。菅谷から近い平澤寺長者塚からは、久安四年(1148年)と「**滋綱(=重綱)**」の銘がある「**鑄銅経筒**」(県指定有形文化財)が出土しています。

#### ◆畠山重忠のルーツ秩父氏

重綱からは**畠山氏**(現深谷市)の他、重隆の流れを汲む**河越氏**(現川越市)、**小山田氏**(現東京都町田市)などが出ており、**鎌倉殿**を支えた御家人として活躍しています。分布は荒川、旧利根川、多摩川の下流域や鎌倉道沿いで、交通の要所を押さえています。



※『桓武平氏諸流系図』、『吾妻鏡』等を参考に作成

秩父氏館跡 埼玉県秩父郡吉田町教育委員会 2001『秩父・中世吉田町の城01』(転載許可:秩父市教育委員会)



吉田町絵図(明治4年作図)。なお、方角は右側が北、下側が東。

武基以来、秩父氏の本拠であったと伝わる場所で、現在は吉田小学校になっています。

館は屈曲する吉田川が形成した舌状台地上に位置します。北と東は同川、南は高低差約20mの山女魚沢で区切られ、天然の要害といえる場所です。

明治4年の吉田町絵図では八幡神社が敷地内に描かれ、畠山重忠建立の伝承が残ります。



現在の秩父氏館跡(現吉田小学校)

上 : 東側斜面。

左下: 東側から。手前は吉田橋。

右下: 南側から。真中に吉田川。

## トピック・・・「秩父神社と妙見信仰」

### ◆平良文の妙見菩薩伝説

秩父氏は郡内に様々な文化をもたらしましたが、その一つに妙見信仰があります。『新編武蔵風土記稿』によれば、良文は国香と戦った際に妙見菩薩に助けられとされ、秩父妙見社は妙見菩薩の霊場であった花園妙見寺(現群馬県高崎市)から勧請したとします。

### ◆妙見信仰と秩父神社の成立

この記事は史実とはいえませんが、良文の孫である忠常(将恒の兄弟)を祖とする千葉氏も妙見を軍神としており、秩父氏が妙見信仰を郡内へ持ち込んだことは十分に考えられます。なお妙見社は嘉禎元年(1235年)に焼失して秩父神社に合祀されたとされ、明治期の神仏分離令まで同神社は「秩父大宮妙見宮」として信仰されます。

## (2) 児玉党(平姓児玉党)・・・町ゆかりの武士のルーツ

### ◆児玉郡の雄、児玉党

児玉郡に勢力があった党で、有道姓を名乗っています。党祖の維行は阿久原(現神川町)を本拠としましたが、同地は秩父牧を構成する阿久原牧の比定地です。維行の子である弘行、経行は「別当」を称しています。児玉党は後に九郷用水流域に地盤を築き、周辺へ勢力を拡大しました。なお金鑽神社(現本庄市)は児玉・丹両党の信仰が篤く、境内には丹党安保氏が寄進、建立した多宝塔(国指定重要文化財)が存在します。

### ◆町の武士の祖、行重と行高

児玉経行が子の行重、行高を重綱の養子にしたことは述べましたが、その子孫は秩父・平を冠して平姓児玉党と呼ばれ、本町を含む郡内や周辺に勢力を伸ばしました。



金鑽神社多宝塔(国重文)

## (3) 丹党・・・秩父神社を支えた武士

### ◆秩父の中村氏、長瀬の岩田氏

現在の秩父神社一帯を本拠とした党です。『勅使河原氏之系譜』によれば丹武時が「馬寮<sup>めりょうしこう</sup>伺候秩父郡牧別当」「秩父十郎」を称しており、この頃に武基と関係を結び、秩父牧を構成する石田牧を掌握したと思われます。

郡内からは、鎌倉時代後期に宮本地頭として秩父神社の造営に携わった中村氏や、石田牧の有力な候補地である岩田(現長瀬町)に勢力を有し、後に藤田家(北条氏邦)家老として活躍した岩田氏が出ています。また、現東秩父村の槻川周辺の出で、承久の乱後に中村氏とともに播磨国三方西(現兵庫県)へ西遷した大河原氏が存在します。

## トピック・・・「武蔵武士と牧」

児玉党や丹党の発展に牧が大きな役割を果たしたと述べましたが、秩父牧についても少し見てみましょう。

### ◆<sup>みまき</sup>御牧だった秩父牧

牧は馬や牛の飼育や繁殖のための場で、「御牧（勅旨牧）」、「諸国牧」、「私牧」がありました。秩父牧も含まれる御牧は皇室に馬を供給する牧で、信濃、上野、甲斐、武蔵国に置かれています。延喜五年（905年）の『延喜式』によれば、武蔵国の御牧には石川、小川、由比、立野の4つがあります。秩父牧がありませんが、これは同牧が御牧になったのが承平三年（933年）であったため、それ以前は朱雀院の牧でした。

### ◆<sup>こまひき</sup>牧の管理

秩父牧は、年20頭の馬を朝廷に献じることが定められ、毎年8月13日に<sup>こまひき</sup>駒牽という献呈された馬を引き回す行事が催されました。牧の責任者には別当が任命され、朝廷に馬を届けることが課されました。別当の下には現場監督にあたる牧長と牧子がいたとされます。

### ◆<sup>こまひき</sup>武士と牧

『政事要略』などに記載される別当の一覧に秩父武基や丹武時の名はなく、「別当」などの注記は私称だと分かります。実際は牧長クラスでしょう。なお、朝廷への貢馬は時代とともに滞りますが、これは在地武士が牧を私領化したためと思われます。弓馬の芸はこのようにして磨かれました。

### ◆大字野牧と岩田

石田牧の所在地については長瀨町岩田と皆野町野巻の2説に分かれています。丹党岩田氏が出ていることから、現時点では前者が有力です。なお『新編武蔵風土記稿』では、平野が少ない秩父では、牧は河川沿いに複数存在していたのではないかと記され、説得力があります。



馬子屋敷周辺 (大字野巻)



野巻は、赤平川が形成した河岸段丘が前原山を取り巻くように細長く広がり、高橋沢をはじめとする沢で区画されています。自然繁殖を主とした古代にあっては、牧の経営に有利な場所といえます。馬子屋敷や馬子田などの地名も残っています。野巻も秩父牧の一部であったかもしれません。

## 第2章 郡内の虎の者共

### 2-1 古文書から見る郡内の武士

重綱の大蔵進出後、郡内の武士は秩父氏の流れを継いだ各氏、特に畠山氏の有力な支持母体となりました。治承・寿永の乱では多くの合戦に参加し、幕府成立後も鎌倉殿の警護や年中行事への参列、京都大番役のため繰り返し鎌倉や朝廷へ出向いています。ここでは町にゆかりが深い平姓児玉党と、丹党の活躍について古文書をもとにまとめましょう。

#### (1) 治承・寿永の乱

##### ◎ 一ノ谷の合戦【出典：『吾妻鏡』 寿永三年（1184年）2月5日条】

摂津国に入った源氏が7日を箭合わせの時と決めた後の記事です。大手の蒲冠者範頼に従う者に「秩父武者行綱」の名が見えます。系図では行重の孫に「武者三郎行綱」がいます。

#### (2) 鎌倉幕府成立後

##### ① 鎌倉殿の上洛【出典：『吾妻鏡』 建久元年（1190年）11月7日条】

鎌倉殿となった頼朝の上洛に隋兵として従った者が記され、後陣隋兵十八番に「秩父平太」の名が見えます。系図では秩父平太は行重ですが、年代的に無理があります。同じ十八番に、大淵を名乗った高重の兄弟、倉賀野三郎高俊の名が見えます。

### ●児玉（平姓児玉）党系図



※『武蔵七党系図』、『吾妻鏡』等を参考に作成

② 重忠による児玉・丹両党の仲裁 【出典：『吾妻鏡』 建久4年(1193年)2月9日条 同月18日条】

### ◆『吾妻鏡』の記事

2月8日、児玉・丹両党に確執があり、合戦に発展しそうであったため、畠山重忠が命ぜられて仲裁に乗り出したと記されています。同月18日の記事では、重忠が両者を説得して両党の和平が成り、双方とも兵を引いたとしています。

### ◆重忠誅殺と、北条家の武蔵武士の掌握

当記事から承久の乱までの間に、比企氏の乱をはじめ重忠の誅殺、和田義盛の乱など幕府内で動乱が生じます。これらは北条氏による武蔵国武士の掌握が目的と理解されており、以後、党の者は北条氏の管轄下に置かれることとなります。

③ 承久の乱 【出典：『吾妻鏡』 承久三年(1221年)6月18日条】

承久元年(1219年)の実朝暗殺に伴い、親王の下向を求めた北条氏と後鳥羽上皇の関係が悪化したことに端を発します。

承久三年5月、上皇側が北条義時追討の<sup>せんじ</sup>宣旨を発したことから全面衝突に発展しました。6月14日、宇治川で激しい戦いが繰り広げられ、18日には恩賞を行う資料がまとめられました。「秩父平五郎」と「秩父次郎太郎」が一人討ち取ったとされます。

### トピック・・・重忠と武蔵国留守所惣検校職

上の記事に関して、「<sup>むさしのくにるすどころそうけんぎょうしよく</sup>武蔵国留守所惣検校職」と関連した議論があります。同職は武蔵国武士の統率権にあたるもので、重綱から重隆の系統である河越氏に受け継がれたとされます。河越氏は後に、頼朝と対立した義経に娘を嫁がせた件で所領を没収されており、記事の時点では重忠が職を継いでいたといわれます。重忠はそれに基づき、両者の調停にあたったこととなります。

一方、同職が『吾妻鏡』のみに記載されていることから、後世に北条氏が捏造したという説もあります。これを受ければ、党の者をはじめとする武蔵武士から支持が厚かった重忠が選ばれたことになるでしょう。



④ 京都六条八幡宮の再建 【出典：『六条八幡宮文書』より「六条八幡宮造営注文」 建治元年(1275年)】

火災で焼失した同宮の再建のため、**各国御家人に課された負担額と御家人名を記した文書**です。「秩父平太入道跡」に六貫、「秩父武者次郎跡」に七貫が課されています。

同文書には、33ヶ国、計469名の御家人が記されています。武蔵国には84名の記載がありますが負担額は相対的に低く、中小武士が多かったことが示唆されます。なお「跡」の付く武士は故人であり、子孫が当人の名で賦課したことを意味します。行重(秩父平太)や行綱(秩父武者次郎)は一族を象徴する武士だったのでしょう。

⑤ 丹党中村氏と郷々地頭 【出典：『秩父神社文書』(県指定有形文化財)より「中村行郷申状(写)」 元亨二年(1322年)】

◆鎌倉時代まで続いた牧

秩父神社所在地である宮本の地頭であり、秩父神社神官であった中村行郷の訴状です。内容は、**秩父郡では毎年19疋の馬を貢納することになっており、各郷の地頭が銭で支払う決まりであるにも関わらず、直弘名の地頭が支払っていないというものです。**

◆秩父神社を支えた中村氏

申状から、鎌倉後期でも秩父牧が制度上は機能していたことが分かります。また中村氏が郡郷々地頭のとりまとめ役であったことも推察されます。実際、「秩父社造営料木注文案」(正和二年(1313年))では、火災で焼失した秩父神社の再建に必要な垂木、柱、板材などの供出が中村氏から各郷に命じられています。

トピック・・・播磨の国から愛をこめて

◆東秩父村の刀剣

東秩父村にある「道の駅 和紙の里ひがしちちぶ」内の「ふるさと文化伝修館」には、三振の刀剣の写しが展示されています。これらは承久の乱の恩賞により、丹党中村氏とともに播磨国三方荘へ西遷した大河原氏が造らせたものです。内訳は元亨三年(1323年)の短刀一振、正中二年(1325年)と嘉暦四年(1329年)の銘がある二振の太刀です。

◆秩父への望郷

嘉暦四年の太刀には「武蔵国秩父郡住 大河原左衛門尉丹治時基願主」の銘とともに、長船景光・景政を招いてこの太刀を造らせたと刻まれています。播磨にいながら秩父郡住と刻んだところに、故郷への深い想いを読み取ることができます。

## 2-2 町ゆかりの武士

### (1) 大浜氏

#### ◆行重の流れを汲む大浜氏

系図によれば行重の流れを汲む武士で、一の谷の合戦に名を残した行綱の孫・義助が大浜四郎太郎を名乗っています。現大浜の円福寺・皆野棕神社周辺に本拠があったとされますが、文書や遺物はなく、詳細は不明です。

#### ◆鎌倉殿以後の大浜氏

応永二十五年（1418年）の『足利持氏御判御教書』に、大濱崇持寺の住職が田畠在家に乱暴狼藉を働いていることが記され、当時の様相が分かります。北条氏邦支配下では秩父衆の中に名が見え、息長く活躍したと考えられます。

#### ◎ 円福寺（大字皆野中大浜地区）

「円福寺舊来記」によれば将門の弟・将平創建で、近世まで皆野棕神社は同寺持ちでした。土蔵には室町時代後期に製作された獅子頭（町指定有形文化財）が保管され、夕闇に舞う皆野棕神社獅子舞（県指定無形民俗文化財）も古式です。境内には将平と畠山重能の墓と伝わる五輪塔（町指定史跡）が板碑とともに残ります。



円福寺（皆野町大字皆野中大浜地区）



畠山重能の墓



将平の墓



境内の板碑

### トピック・・・畠山重能の余生

#### ◆重能、東国へ落ち延びる

重忠が挙兵後の頼朝のもとへ参じた時、父・重能は京都大番役として在京していたとされます。『平家物語』によれば、重能は平家一門の都落ちの際に特別に許され、小山田有重とともに東国へ落ち延びたといわれます。『吾妻鏡』では平貞能の手引きにより帰還したとします。なお『吾妻鏡』には、その後の有重に関する記事はありますが、重能はありません。

#### ◆重忠伝説と重能伝説

郡内には重忠開基の縁起や重忠の位牌を有すると伝える寺社が多く、地元武士の重忠ひいては高家秩父氏への想いが分かります。重能の墓もそのようにとらえるのが妥当でしょう。ただ重能に関する伝承は全国にほとんどなく、本当の墓ではないかと考えさせられます。

## (2) 大淵氏

### ◆行高の流れを汲む大淵氏

行高の流れを汲む一族で、現在の大字大淵周辺に本拠があったと思われます。系図では行高の子・高重が大淵平二郎を称しており、小幡、倉賀野とともに最も早く勢力が扶植された地です。

### ◆有行の実名板碑

高重のひ孫にあたる有行は、正法寺観音堂墓地から出土した「平有行の実名板碑」（町指定有形文化財：考古資料）に名を残し、同氏の勢力に現在の金沢地区も含まれていたと推察できます。

### ◆大淵氏の館

平成6年に実施された一貫目遺跡の発掘調査の際、時期は不詳ですが薬研堀の跡が発見されました。周辺に屋敷前という地名もあり、一帯は館の候補地となっています。

### ◆大淵氏の退転

金室家文書（町指定有形文化財：古文書）の慶長三年（1593年）「大淵村地詰御坪入帳」に長楽寺内彦右衛門の名があり、この者が大淵を名乗っていたとする伝承があります。事実であれば、鉢形落城直後まで大淵氏は町内に居住していたことになります。



平有行の実名板碑

長さ54cm、幅30cm。2つの種子の上に蓮座が見え、阿弥陀を中央に観音、勢至両菩薩が配される阿弥陀三尊と考えられます。

正和五年（1316年）九月八日の年銘があり平有行の実名が刻まれています。



一貫目遺跡出土の薬研堀



正法寺近隣にある西光寺の中世石塔群

和暦	西暦	秩父郡と町の武士の動き	全国の動き
延喜3	903	朱雀院牧である秩父牧御馬の貢進と駒牽が行われる（政事要略）	
延喜5	905		御牧に石川、小川、由比、立野各牧の名があげられる（延喜式）
承平3	933	石田牧と阿久原牧が、秩父牧として御牧になる。毎年20疋入貢が定められる（政事要略）	
天慶2	939		秩父牧別当藤原惟修、位階を賜う（貞信公記抄）
天慶3	940	平将平、石間城で討たれ円福寺に葬られる（円福寺舊来記）	
万寿5	1028	忠常、安房守平維忠を殺害（平忠常の乱）	
永承6	1051		源頼義、安部氏鎮圧のため陸奥国に派遣される（前九年の役）～康平5年（1062）
永保3	1083	秩父武綱、後三年の役に義家側として参陣、白旗を賜る（延慶本平家物語）	頼義の子の義家、清原家の抗争調停に乗り出す（後三年の役）～応徳4年（1087）
天永4	1113		横山党20余人、相模国愛甲荘の代官を殺害（続群書類従）。党の者、活躍を始める。
久安4	1148	平澤寺長者塚に同年銘を有する「滋綱」銘の経筒	
久寿2	1155	秩父重隆・源義賢、大蔵館で秩父重弘・源義平に討たれる（大蔵合戦）	
保元元	1156		源義朝・平清盛が源為義・平忠正等を討つ（保元の乱）
平治元	1159	武者太郎行俊、平治の乱で討死（武蔵七党系図）	源義朝、平清盛に敗れる。頼朝伊豆へ配流となる（平治の乱）
治承4	1180		8月：頼朝、伊豆国で挙兵（治承・寿永の乱） / 10月：畠山重忠、河越重頼、江戸重長、頼朝に従う
寿永2	1183	畠山重能と小山田有重、都落ちする平家から暇をもらい東国へ落ち延びる（平家物語）（吾妻鏡）	平家の都落ち
元暦元	1184	一の谷の合戦。源範頼従者に秩父武者行綱（吾妻鏡）	一の谷の合戦
文治元	1185		1月：畠山重忠、河越重頼等、義経に従い京都に入る / 3月：壇ノ浦の合戦。平家滅亡する 11月：河越重頼、義経縁者として所領を没収される / 11月：守護・地頭が設置される
文治5	1189		頼朝、奥州藤原氏を滅ぼす（奥州合戦）
建久元	1190	頼朝上洛に際し、後陣随兵十八番として秩父平太が参列（吾妻鏡）	
建久4	1193	丹、児玉両党に確執。畠山重忠の仲裁により、両党和平する（吾妻鏡）	
建仁3	1203		頼家の外戚であった比企一族、北条氏に滅ぼされる
元久2	1205		畠山重忠と子の重保、北条氏に誅殺される
建暦2	1212		北条時房、武蔵国の田文調査に関し、各郷に郷司職を補任すべきか協議（吾妻鏡）
建暦3	1213		和田義盛、北条義時に討たれる
承久元	1219		実朝暗殺される
承久3	1221	承久の乱。宇治川の合戦で秩父平五郎、同次郎太郎、敵を討ち取る（吾妻鏡）	後鳥羽上皇、義時追討の宣旨。承久の乱起こる
嘉禄2	1226		河越重員、重綱以来の職として「武蔵国留守所惣檢校職」に補任される（吾妻鏡）
嘉禎元	1235	秩父妙見社、落雷で焼失。後に秩父社と合祀され、秩父神社の原型が整う	
宝治元	1247		北条氏と安達氏、三浦一族を滅ぼす（宝治合戦）
建長6	1254	秩父弥五郎、正月の御的初めに六番射手として参列（吾妻鏡）	
建治元	1275	京都六条八幡宮の再建に際し、秩父平太入道跡6貫、秩父武者次郎跡7貫の賦課（六条八幡宮文書）	
延慶4	1311	岩田六郎、井戸弥九朗、薄四郎次郎、吉田五郎次郎、平太郎、秩父神社遷宮に関わる流鏑馬射手役を拒否。中村行郷に訴えられる（秩父神社文書）	
正和5	1316	正法寺観音堂墓地に同年銘を有する「平有行」銘の板碑	
元亨2	1322	中村行郷、秩父牧御馬の代銭納負担に関して直弘名地頭の <small>小野沢尼</small> を訴える（秩父神社文書）	
元亨4	1324	中村行郷、秩父神社造営のため、各郷に木材等の注文を命じる（秩父神社文書）	